

病害虫発生予察特殊報 第3号

害虫名 アカスジカスミカメ

Stenotus rubrovittatus MATSUMURA

1 発生作物 水稻

2 発生経過

平成 14 年 6 月中旬、木曾郡山口村の予察灯で初めて本種の誘殺が見られ、7 月にも誘殺が見られた。また、南信農業試験場が 7 月上旬に下伊那郡阿智村の雑草地（イタリアンライグラス主体）で行ったすくい取り調査で本種が捕獲された。その後、県南部地域（飯田市、阿南町、下條村、根羽村、売木村、南木曾町）の雑草地、休耕田、水田畦畔等でも本種が捕獲された。

本種は西南暖地などで斑点米の原因となる主なカメムシの一つとして知られているが、これまで県内での生息は確認されていなかった。今後、県南部では本種の加害による斑点米が発生する可能性がある。

3 形態

成虫の体長は 4.6~6.0mm、体色は淡黄緑色で、前胸背の両側から前翅会合部にかけて橙赤色の縦条がある。また、触角第 1、2 節や、各腿節基部が橙赤色を呈する。

本種は同科のアカヒゲホソミドリカスミカメと比べると体幅が広く、腿節が太い。

4 生態と被害

- (1) 本種の長野県内での発生生態は不明であるが、西南暖地においては年 4 世代を経過し、卵で越冬後、6 月上旬、7 月中旬、8 月上中旬、9 月中旬に成虫発生の最盛期を迎える。水田には出穂期頃から成虫が飛来する。水稻で 1 世代経過可能である。
- (2) 産卵は寄主植物の開花期に穎内にする。発育零点は卵が 12.6℃、幼虫では 11.6℃である。
- (3) 本種を含むカスミカメ類は主として乳熟期に吸穂加害する。口器がぜい弱なため、籾の穎頂部や内外穎のすき間から吸汁する。加害部位は黒変し斑点米となる。
- (4) 寄主植物はイネのほかイタリアンライグラス、メヒシバ、スーダングラス、スズメノビエ、ソルゴー等である。

5 防除対策

防除はアカヒゲホソミドリカスミカメやホソハリカメムシなどの飛翔性のカメムシ類に準じて以下のとおり行う。

- (1) 本種は出穂期頃に周辺から水田へ飛来する。水田周辺での生息密度を低く保つため、繁殖場所となる畦畔や休耕田、雑草地等の草刈りを行い、水田周辺での生息密度を低く保つ。この際、避難場所が残らないよう、地域で一斉に実施する。

なお、出穂 10 日前以降の草刈りは被害を助長する可能性があるので行わない。

- (2) 本田での薬剤による防除は、成虫の飛来最盛期となる穂ぞろい期と、幼虫が孵化し始める穂ぞろい 7 日後に行う。

アカスジカスミカメ写真

写真提供：長野県農事試験場病害虫土壌肥料部

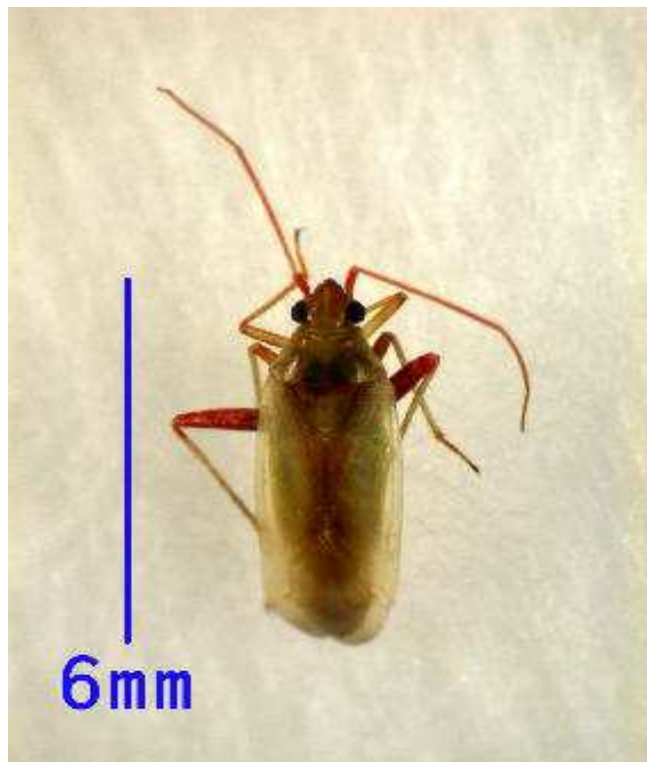


写真1：アカスジカスミカメ成虫（体長 4.6～6.0mm）



写真2：カスミカメ類による斑点米
（粃の穎頂部から加害）



写真3：カスミカメ類による斑点米
（内外穎のすき間から加害）